

『法華經』の安樂行としての戒行の研究*

李 承南**著・水谷 香奈***訳

序論

『法華經』の第十四安樂行品では、次のように説いている。「もし菩薩摩訶薩が後代の悪世で『法華經』を説こうとするなら、まさに四つの法に安住すべきである。」ここで言う四つの法とは、四安樂行である。天台大師智顛（538-597）は、四安樂行について身安樂行、口安樂行、意安樂行、誓願安樂行であると述べている¹。本論文では、第十四安樂行品について解釈している『法華文句』の内容を中心に研究しようと思う。

これらの四安樂行は菩薩が修めるものとしての菩薩行である。菩薩が悪世で実践するものである。また、四安樂行は『法華經』を説こうとする菩薩が実践するものである。『法華經』を受持し説く者を法師という。これらの法師が実践することから四安樂行は一種の法師行であるといえる。また、『法華經』は円教を説いているため、この經を保持し知らせる法師は円教菩薩である²。簡単に言えば四安樂行は悪世にて実践すべき菩薩行であり、法師行として円教菩薩が修めるものである。

これらの四安樂行に表れた戒行について研究しようと思う。まず安樂行の中で、菩薩の戒行とはどのようなものかを解明したい。次に安樂行は止行としての戒行を優先的に説いているが、その理由は何かを解明したい。次に安樂行は戒行の因行が主として説かれているが、このような戒行に

*原題「『法華經』의 安樂行으로서 戒行의 研究」。

**이승남 (광도) (イ・スンナム [グァンド])。金剛大学校仏教文化学科教授。

***東洋大学東洋学研究所客員研究員。

よって成就できる果徳は何かを解明したい。これらの議論を通じて、安楽行で述べている戒行とそれを強調している理由、そしてそれにより成就できる果徳について知ることができると考えている。

1. 止行の戒行

安楽行は法身・解脱・般若の三徳を成就するものである。これらの三徳を成就するためには、止行・慈悲行・観行の三行を行わねばならない。したがって安楽行は、これらの三行からなると言える。これら三行の中で止行は戒行へと関連付けることができる。ここではまず安楽行の三行について説明し、次に三行の中で止行とは防業を言い、これが菩薩の戒行であることを明らかにしたい。

1-1. 安楽行の三行

安楽行は安・楽・行の三項目として区分することができる。『法華文句』では、依事・附文・法門によって安楽行を解釈している³。これを表として示すと以下の通りである。

表. 安楽行の三項目

	安	楽	行
依事	身無危険 [身安]	心無憂惱 [心楽]	能進行 [身安心楽故]
附文	著如来衣 [法身安]	入如来室 [解脱心楽]	坐如来座 [般若導行進]
法門	安名不動	楽名無受	行名無行

上記の表の中で、附文に関連して『法華文句』では次のように説明している。「如来の服を着ているので法身は快適であり、如来の部屋に入っているので解脱の心は楽しく、如来の座に座っているので般若としての道を進

むことができる。]⁴安楽行は如来の服を着て如来の部屋に入り如来の座に座ることである。それは法身と解脱そして般若を成ずるものだとする。

安楽行は涅槃道として大涅槃を成ずるものだとする。つまり法身・解脱・般若の三徳を成就することである。これら三徳の成就のためには止行・慈悲行・観行を行わねばならず、これが安楽行である。これを表として示すと以下の通りである⁵。

表. 安楽行の三行

止行	慈悲行	観行
三業柔和 違従俱寂	四弘誓願 広度一切	一実相慧 無分別光
体法身行	体解脱行	体般若行
著如来衣	入如来室	坐如来座
安	楽	行

初めて発心した菩薩は因時に止行・慈悲行・観行の三行を用いて身業・口業・意業の三業を導くことで、それを清浄にして六根清浄を成じ、相似菩提を成じて一分の中道を悟り分真菩提に入る。この時、三行により断徳・恩徳・智徳の三徳を成ずる。止行を原因として断徳の結果を成就し、慈悲行を原因として恩徳の結果を成就し、観行を原因として智徳の結果を成就する⁶。止行は体法身行として法身を成ずるものであり、慈悲行は体解脱行として解脱を成ずるものであり、観行は体般若行として般若を成ずるものである。簡単に言えば止行・慈悲行・観行の三行は断徳・恩徳・智徳の三徳を成ずるものであり、これらの三徳は法身・解脱・般若を意味する。

安楽行を研鑽して到達する結果は、これらの三徳である。四安楽行は止行・慈悲行・観行の三行を用いて身業・口業・意業の三業と誓願を導き、断徳・恩徳・智徳即ち法身・解脱・般若の三徳を成ずるものである。

1-2. 防業の戒行

安楽行品では身安楽行、口安楽行、意安楽行、誓願安楽行の四安楽行に

ついて説明している。安樂行は止行・慈悲行・観行の三行に分けることができ、この順序で説明している。特に止行は最初に説かれている。このような止行について安樂行品に説かれていることと『法華文句』で解釈されていることを表にまとめるならば、以下の通りである。

表. 四安樂行の止行

	第十四安樂行品の止行	『法華文句』の解釈	
身安樂行	“住忍辱地 柔和善順”	行処	行不行
	“不親近国王王子 … 中略 … 亦不樂與同師”	近処	遠十惱乱 [戒門]
口安樂行	“若口宣説 若説経時 不楽説人 及經典過 … 中略 … 又亦不生怨嫌之心”	一不説過 二不輕慢 三不歎毀 四不怨嫌	
意安樂行	“無懷嫉妒 誣誑之心 … 中略 … 又亦不応 戲論諸法 有所諍競”	一不嫉詔 二不輕い 三不惱乱 四不諍競	
誓願安樂行	“於在家出家人中 生大慈心 於非菩薩人中 生大悲心 … 中略 … 以神通力智慧力 引之令得住是法中”	不懈怠	

身安樂行は行処と近処により構成されている。行処において、止行は「住忍辱地柔和善順」であると述べている。『大智度論』では、「忍辱能取尸羅波羅蜜」⁷として、忍辱はこの戒波羅蜜を成就することができるかと述べている。そして近処は第一親近処と第二親近処よりなっている。第一親近処は（1）遠十惱乱の戒門と（2）修撰其心の定門について説いており、第二親近処は慧門について説いている⁸。このように近処は戒定慧の三学について説いている。ここで示すように、安樂行としての止行・慈悲行・観行の三行は戒・定・慧の三学に関連付けられる。

身安樂行において行処の止行は忍辱であると言われており、近処の止行は遠十惱乱であると述べられている。『大智度論』では、行処の止行として忍辱について戒波羅蜜であると言われており、『法華文句』では近処の

止行として遠十惱乱について戒門であるとした。このように身安楽行から行処と近処の止行は戒に関連付けられることが知られる。口安楽行・意安楽行・誓願安楽行の止行を見ると、不説過・不輕慢・不歎毀・不怨嫌・不嫉諂・不輕罵・不惱乱・不諍競・不懈怠等として説いている。身安楽行の遠十惱乱に加え、これらはすべての身口意において罪を犯さないように要求している。このように四安楽行の止行は忍辱と離過について説いており、それは戒行を意味する。

2. 戒行の重視

安楽行は後代の悪世で『法華経』を説こうとする菩薩に対して説かれたものである。彼らに向けて止行を強調している。第十法師品において法師行は入如來室・著如來衣・坐如來座であると説いている。ところが、第十四安樂行品において安樂行は著如來衣・入如來室・坐如來座であると説いている。三行の中で法師行は慈悲行を優先的に述べており、安樂行は止行を優先的に述べている。これらの理由について明らかにしたい。

2-1. 浅行菩薩の弘經

『法華経』の第十四安樂行品の冒頭にて、文殊菩薩は釈迦牟尼仏に次のように述べた。「世尊よ！ これらの多くの菩薩は極めて存在しがたいものです。仏を尊敬し従うことにより、大誓願を發して、後代の悪世に『法華経』を護持し読誦して説くことでしょう。」⁹ここで文殊菩薩は、第十三勸持品にて『法華経』の流布を誓願した菩薩たちを賞賛した。彼らは修行と功德が深い菩薩たちであり、深行菩薩という¹⁰。

続いて文殊菩薩は、次のような質問をした。「世尊よ！ 菩薩摩訶薩は後代の悪世においてどのようにこの『法華経』を説くのですか？」¹¹ここで述べた菩薩たちは修行と功德が浅い人々であるから浅行菩薩という¹²。この菩薩たちは悪世の濁りに染まりやすく、教化の功德が少なく『法華経』

を流布することが難しい。彼らが研鑽すべき菩薩行について釈迦牟尼仏に尋ねたのである。この問いに対して釈迦牟尼仏は、浅行菩薩が後代の悪世に『法華経』を説こうとするならば四安楽行を行ずるべきである¹³と答えた。

浅行菩薩は、悪世に身を置いて『法華経』を流布し、円行を研ぎ、三徳を完成しようとする。法師として菩薩行を実践し仏道を完成しようとする。しかしながら、彼らは濁りに染まりやすく教化の功徳が少なく、自らの円行を為すことも難しい。彼ら浅行菩薩が濁りに染まらないようにしながら教化できるようにし、また、円行の自行を成就する方法を説いているのが安楽行である¹⁴。安楽行は止行・慈悲行・観行の因行として法身・解脱・般若の三徳を成就するものである。菩薩は自らの三徳を成就しつつ他者の三徳をも成就させるのである。

2-2. 戒行の優先

浅行菩薩は濁りに染まりやすい。彼らに安楽行を説くことで、優先的に持戒を勧め業を犯さないようにする。『菩薩戒義疏』では、菩薩戒について却悪と遍防三業だと述べている¹⁵。『修習止観坐禅法要』では、戒に基づいて様々な禅定が起き、苦痛を滅する智慧が生じる¹⁶とした。持戒は業を犯さないようにするのみならず、禅定に入ることができ、また智慧を得ることにもなる。これらの理由から、戒行を研鑽しなければならない。

安楽行は『法華経』を弘布する菩薩に説かれたものである。『法華経』を受持し説く者を法師という。第十法師品では、次のように説いている。

如来の部屋に入り、如来の服を着て、如来の座に座り、ここに四衆のために広く『法華経』を説くべきである。如来の部屋とは、すべての衆生のための大慈悲の心がこれである。如来の服とは、柔和と忍辱の心がこれである。如来の座とは、すべての法が空であるとして、そこに安住することである¹⁷。

法師は如来の部屋に入り、如来の服を着て、如来の座に座り『法華経』を説かねばならない。如来室は大慈悲心であり、如来衣は柔和忍辱心であり、如来座は一切法空である。法師行とは、大慈悲心の部屋に入り、柔和忍辱心の服を着て、一切法空即ち実相¹⁸の座に座り『法華経』を説くことである。それは入如来室・著如来衣・坐如来座の三種類である。これらの法師行は体解脱行・体法身行・体般若行の三行として解脱・法身・般若の三徳を成就する。これを表として示すと以下の通りである。

表. 法師行の三つの手順

入如来室	著如来衣	坐如来座
起大慈悲心	住柔和忍辱心	観一切法空如実相
体解脱行	体法身行	体般若行

上記の表に示すように法師行は入如来室・著如来衣・坐如来座の順で説かれている。ところが安楽行は著如来衣・入如来室・坐如来座の順に説かれている。言い換えれば止行・慈悲行・観行の順に説かれている。たとえば身安楽行の行処は「住忍辱地 柔和善順」と「而不卒暴 心亦不驚」そして「又復於法 無所行 而観諸法 如実相 亦不行 不分別」の順に説かれている¹⁹。また、近処は戒・定・慧の三学として説かれている。このように安楽行は著如来衣の止行を先に説いている。

法師行と安楽行は、三つの構成要素が同じだが、その順序が異なっている。法師行は、まず如来の部屋に入るが、安楽行はまず如来の服を着るのである。これについて『法華文句』では次のように説明している。法師行は弘経により他人に利益を与えることが根本であるため、入如来室をまず明らかにし、安楽行は悪世に弘経することから、様々な逼悩を安らかにさせる必要があるので、著如来衣を先に明らかにする²⁰。法師行は弘経益他により慈悲心が優先となるが、安楽行は悪世弘経により忍辱と離過が優先となるのである。

法師行は入如来室・著如来衣・坐如来座の順に述べ、安楽行は著如来衣・

入如来室・坐如来座の順序で述べるが、これらはすべて円行である。一行が無量行であるから不可思議であり、本来の順序を定めることができるものではない²¹。このように法華の円行として見ると、一行が無量行である。しかしながら説かれる時には順番どおりとする。最初に席に座り、次に部屋に入り、次に服を着ると述べる。たとえこのように順番どおりに説いたとしても、行ずるときには、最初に席に座る時に同時に部屋に入って服を着るのである²²。

3. 戒行の因果

安楽行は止行・慈悲行・観行の三行であると言うことができ、これらの三行により法身・解脱・般若の三徳を成就することができる。この中で止行が戒行に関連付けられるとすれば、これらの戒行は一つの因行だと言える。もしそうならば、戒行の因行を用いて成就することができる果徳は何かを解明したい。

3-1. 安楽行と三徳

浅行菩薩は悪世においてどのように『法華経』を説くべきかについて、文殊菩薩が釈迦牟尼仏に尋ねた。これに釈迦牟尼仏は四法に安住しなければならぬと答えた。ここで述べた四法は身安楽行・口安楽行・意安楽行・誓願安楽行の四安楽行である。これらの四安楽行のそれぞれが止行・慈悲行・観行の三行を備えており、法身・解脱・般若の三徳を成ずるものである²³。

表. 四安楽行の三行と三徳

		安	楽	行
因行	身安楽行	止行	慈悲行	観行
	口安楽行	止行	慈悲行	観行
	意安楽行	止行	慈悲行	観行
	誓願安楽行	止行	慈悲行	観行
果徳 [三徳]		法身	解脱	般若

止行は著忍辱衣によって過ちを脱することであり、これにより断徳を成就する。慈悲行は入如来室によって他者を利することであり、これにより恩徳を成就する。観行は坐如来座によって執着のないことであり、これにより智徳を成就する²⁴。このような三行の中で戒行は止行に含まれる。したがって戒行は忍辱の服を着ることによって過ちを脱することであり、これにより断徳を達成する。これを表にて示すと以下の通りである。

表. 安楽行の三行と法師行および三徳

止行	慈悲行	観行
著忍辱衣	入如来室	坐如来座
離過	利他	無著
成断徳	成恩徳	成智徳

安楽行は円教菩薩が研鑽するものとしての円行である。円行は一運一切運のため如来行とも呼ばれている²⁵。安楽行は著如来衣・入如来室・坐如来座として、それは即ち止行・慈悲行・観行の三行として、法身・解脱・般若の三徳を成ずる。たとえ順序立てて言うとしても、安楽行は円行として、一行が即ち三行であり、三行が即ち一行である²⁶。

3-2. 円行の戒行と大涅槃

円教は円因と円果を明らかにしている。円因は円行のことであり、これ

を行じて円果に至る。安樂行は円行であり、三徳は円果である。安樂を涅槃と呼ぶこともあるが、安樂と涅槃はいずれも円果である²⁷。円行としての安樂行の三行は蔵教と通教そして別教の六波羅密と異なっている。通教と別教がたとえ大乘だと言われるとしても、これらは円運がなされず、涅槃について語ろうとも究竟に至らず、菩薩行にとどまるのみである²⁸。しかし、安樂行は円運に究竟に至るので、如来行である。

『大般涅槃經』に言うには、一行があり、如来行と言われるが、それはいわゆる大乘であって大涅槃に至る²⁹、とした。ここで大乘は円因であり、大涅槃は円果である³⁰。『大般涅槃經』に言う円因としての大乗は五種行によっており、それは聖行、梵行、天行、嬰兒行、病行等の五種類である。円五行は聖行、梵行、天行、嬰兒行、病行等の五行が一心にあるのである。これらの五行は一実相行として、一が五を作るのではなく、五が一を作るでもない。不即不離であって不可思議である。

『法華玄義』では、次のように述べている。

『法華經』には如来莊嚴について自ら莊嚴する³¹とあるが、即ち円聖行である。如来の部屋とは即ち円梵行である。如来の座とは即ち円天行である。如来の服とは二種類あるが、柔和は即ち円嬰兒行であり、忍辱は即ち円病行である。これらの五つの行は、即ち一実相行である³²。

如来莊嚴は円聖行であり、如来の部屋は円梵行であり、如来の座は円天行である。如来の服は柔和と忍辱に分けられ、柔和は円嬰兒行であり、忍辱は円病行である。安樂行とは著如来衣・入如来室・坐如来座であり、これは即ち止行・慈悲行・觀行の三行である。これを表で示すと以下の通りである。

表. 円五行と安楽行

円聖行	如来莊嚴 [戒定慧]	三行
円梵行	入如来室	慈悲行
円天行	坐如来座	観行
円嬰兒行	著如来衣	止行
円病行		

『法華玄義』では、五行が三諦三昧に関連付けられていることを明らかにしている。聖行は真諦三昧、梵行・嬰兒行・病行は俗諦三昧、天行は中道王三昧に属する。これらの三諦三昧は円融し即空即仮即中として、一でありながら三であり、三でありながら一つの如来行であるとされる³³。このように円五行は一行一切行である。円五行は即ち心のことであり、心に備えられている³⁴。

同様に安楽行の三行もまた一行一切行である。『法華文句』では、止行・慈悲行・観行の三行について行不行・不行行・非行非不行として説いている³⁵。このような三行が円融して互いに相即する。行不行は即ち不行行であり、また即ち非行非不行である。円五行と同様に安楽行の三行も即ち心のことであり、心に備えられている。一切諸法の中にあらゆる安楽性がある。

安楽行の三行は、一行が即ち三行であり三行が即ち一行である。止行が即ち止行・慈悲行・観行の三行である。つまり止行の戒行により三徳の大涅槃を成就することができる。身安楽行の近処として遠十惱乱を述べている。豪勢、邪人法、兇険戯、屠殺者、二乗衆、欲想、不男、危害、譏嫌、畜養等を離れなければならないとしている。これら十項目を類別すると、九つは生死と関係があり、二乗衆は涅槃と関係がある。生死と涅槃はいずれも遠ざけるべきものであり、これは即ち寂滅を言う³⁶。寂滅は実相としての大涅槃を言う³⁷。遠十惱乱とは即ち寂滅を言い、生死と涅槃を遠ざけるものである。このように戒行により寂滅の大涅槃に到達することができる。

結論

今まで安楽行の三行の中で止行としての戒行について議論した。ここでは止行の戒行と、これらの戒行の重視と、戒行の果徳など、大きく三つに分けて議論した。

まず止行・慈悲行・観行の三行の中で止行が戒行に該当することを明らかにした。安楽行は安・楽・行の三つに区別することができ、それはそれぞれ著如来衣・入如来室・坐如来座に関連付けられ、また止行・慈悲行・観行として言うことができる。この三行を通じて法身・解脱・般若の三徳を成就することができる。第十四安楽行品を見ると、止行・慈悲行・観行の順に説いており、特に止行を最初に説いているのを見ることができる。身安楽行・口安楽行・意安楽行・誓願安楽行の四安楽行によって止行の内容を見ると、忍辱と離過について説いている。これらの止行は、即ち戒行を意味する。

次に安楽行は戒行を重視していることを解明した。安楽行は実行と功德が浅い浅行菩薩に向けて説かれたものである。浅行菩薩は、悪世に生まれて『法華経』を流布し、円行を研ぎ三徳を成し遂げようとする。しかしながら、彼らは濁りに染まりやすく、教化の功德が少なく、自らの円行を行うことも難しい。これらの浅行菩薩に濁りに染まらないようにしながら教化ができるようにし、また、円行の自行を成ずる方法を説いているのが安楽行である。濁りに染まりやすい浅行菩薩に安楽行を説くことで、優先的に持戒を勧め業を犯さないようにする。

次に安楽行の三行の中で止行の戒行により大涅槃を成就できることを解明した。止行は著忍辱衣により罪を離れ法身徳を成就することであり、慈悲行は入如来室により他者を利して解脱徳を成就することであり、観行は坐如来座により執着しないようにして般若徳を成就することだという。安楽行は円教菩薩が研鑽するものとしての円行である。たとえば順に言うのであれば、それは円行として一行は即ち三行であり、三行は即ち一行である。

止行とは即ち止行・慈悲行・観行の三行である。よって止行の戒行によって三徳の大涅槃を成就することができる。

結論として安樂行は止行・慈悲行・観行の三行からなっており、このうち止行は戒行に関連付けられ、修行と功德が浅い浅行菩薩に、これらの戒行を優先的に実践するよう要求し、戒行の一行により大涅槃に到達することができることを明らかにした。

参考文献

- 『大般涅槃經』（『高麗大藏經』9）。
『妙法蓮華經』（『高麗大藏經』9）。
龍樹、『大智度論』（『高麗大藏經』14）。
智顛、『妙法蓮華經文句』（『大正藏』34）。
智顛、『妙法蓮華經玄義』（『大正藏』33）。
智顛、『菩薩戒義疏』（『大正藏』40）。
智顛、『修習止観坐禅法要』（『大正藏』46）。

【注】

- 1 智顛、『妙法蓮華經文句』（『大正藏』34, p.119上），“天台師云 止観慈悲 導三業及誓願 … 中略 … 是名身業安樂行 餘口意誓願 亦如是。”
- 2 智顛、『妙法蓮華經文句』（『大正藏』34, p.118中），“結七方便 羸因羸果 皆非安樂行 獨此妙因妙果 稱安樂行也。”
- 3 智顛、『妙法蓮華經文句』（『大正藏』34, p.118上-中），“釋此品為三 依事 附文 法門 … 中略 … 是故名行 即法門也。”
- 4 智顛、『妙法蓮華經文句』（『大正藏』34, p.118上），“著如來衣 則法身安 入如來室 故解脫心樂 坐如來座 故般若導行進。”
- 5 智顛、『妙法蓮華經文句』（『大正藏』34, p.118中），“安樂行 是涅槃道 涅槃有三義 謂三徳祕藏 行有三義 謂止行観行慈悲行 止行者 三業柔和 違從俱寂 即是體法身行 即上文如來衣也 観行者 一實相慧 無分別光 即體般若行 即上如來座也 慈悲行者 四弘誓願 廣度一切 即體解脫行 即上文如來室也。”
- 6 智顛、『妙法蓮華經文句』（『大正藏』34, p.118中-下），“大論云 菩薩從初發心 常観涅槃行道 因時 用此三行法 導三業為行 三業淨故 即是淨於六根 六根

- 若淨發相似解而得入真果時名佛眼耳等因名止行果名斷德因名觀行果名智德因名慈悲行果名恩德。”
- 7 龍樹,『大智度論』(『高麗大藏經』14, p.1309中),“我今已能忍辱則行此事易是名說忍辱能取尸羅波羅蜜。”
 - 8 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.120上-中),“云何名近下第二近處文為三遠十惱亂即遠故論近亦是附戒門助觀修攝其心即近故論近亦是附定門助觀也觀一切法空即非遠非近論近亦是附慧門助觀。”
 - 9 『妙法蓮華經』(『高麗大藏經』9, p.768中),“世尊是諸菩薩甚為難有敬順佛故發大誓願於後惡世護持讀說是法華經。”
 - 10 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.119上),“品文有問有答問中先歎前品深行菩薩能如此弘經。”
 - 11 『妙法蓮華經』(『高麗大藏經』9, p.768中),“世尊菩薩摩訶薩於後惡世云何能說是經。”
 - 12 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.119上),“後問淺行菩薩云何惡世宣說是經。”
 - 13 『妙法蓮華經』(『高麗大藏經』9, p.768中),“佛告文殊師利若菩薩摩訶薩於後惡世欲說是經當安住四法。”
 - 14 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, pp.118下-119上),“若初依始心欲修圓行入濁弘經為濁所惱自行不立亦無化功為是人故須示方法明安樂行故有此品來也。”
 - 15 智顓,『菩薩戒義疏』(『大正藏』40, p.563上),“菩薩戒者運善之初章却惡之前陣…中略…菩薩律儀遍防三業。”
 - 16 智顓,『修習止觀坐禪法要』(『大正藏』46, p.462下),“第一持戒清淨如經中說依因此戒得生諸禪定及滅苦智慧是故比丘應持戒清淨。”
 - 17 『妙法蓮華經』(『高麗大藏經』9, p.761下),“入如來室著如來衣坐如來座爾乃應為四眾廣說斯經如來室者一切眾生中大慈悲心是如來衣者柔和忍辱心是如來座者一切法空是安住是中。”
 - 18 『妙法蓮華經』(『高麗大藏經』9, p.768下),“觀一切法空如實相。”
 - 19 『妙法蓮華經』(『高麗大藏經』9, p.768中),“住忍辱地柔和善順而不卒暴心亦不驚又復於法無所行而觀諸法如實相亦不行不分別。”
 - 20 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.119上),“法師品略示弘經則以益他為本先明入室此中辨惡世弘經安諸逼惱先著如來衣。”
 - 21 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.119上),“此安樂行有何次第然

- 法華圓行 一行無量行 不可思議 何定前後.”
- 22 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.119上),“若約行次者 諸法從本已來 常自寂滅相 若乖寂起相應 先以般若蕩累 則初坐座 諸法不生而般若生 同體慈悲 愍衆故行道 次入如來室 既以慈悲化世 必涉違從 決須安忍 次著如來衣 雖作此次說 非行時 行時入空 即具一切法 況慈忍耶.”
- 23 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.119上),“四安樂行者 … 中略 … 天台師云 止觀慈悲 導三業及誓願 … 中略 … 是名身業安樂行 餘口意誓願 亦如是.”
- 24 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.119上),“有止行故 著忍辱衣 有觀行故 坐如來座 有慈悲故 入如來室 止行離過 即成斷德 觀行無著 即成智德 慈悲利他 即成恩德 恩德資成智德 智德能通達斷德 是名身業安樂行 餘口意誓願 亦如是.”
- 25 智顓,『妙法蓮華經玄義』(『大正藏』33, p.725中),“若圓行者 圓具十法界 一運一切運 乃名大乘 即是乘於佛乘 故名如來行.”
- 26 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.119上),“此安樂行 有何次第 然法華圓行 一行無量行 不可思議 何定前後 … 中略 … 雖作此次說 非行時 行時入空 即具一切法 況慈忍耶.”
- 27 智顓,『妙法蓮華經玄義』(『大正藏』33, p.725中),“安樂名涅槃 即是圓果.”
- 28 智顓,『妙法蓮華經玄義』(『大正藏』33, p.725上),“舉此標如來行 非餘六度 通別等行 前雖名大乘 不能圓運 前雖名涅槃 過茶可說 乃是菩薩之行 不得名為如來一行.”
- 29 『大般涅槃經』(『高麗大藏經』9, p.99上-中),“爾時 佛告 迦葉菩薩 善男子 菩薩摩訶薩 應當於是大般涅槃經 專心思惟 五種之行 何等爲五 一者 聖行 二者 梵行 三者 天行 四者 嬰兒行 五者 病行 善男子 菩薩摩訶薩 常當修習 是五種行 復有一行 是如來行 所謂 大乘大涅槃經.”
- 30 智顓,『妙法蓮華經玄義』(『大正藏』33, p.725上),“大經云 復有一行是如來行 所謂大乘 大般涅槃 此大乘是圓因 涅槃是圓果.”
- 31 『妙法蓮華經』(『高麗大藏經』9, p.760中),“藥王 其有讀誦 法華經者 當知是人 以佛莊嚴 而自莊嚴 則爲如來 肩所荷擔.”
- 32 智顓,『妙法蓮華經玄義』(『大正藏』33, p.725中),“文云 如來莊嚴 而自莊嚴 即圓聖行 如來室 即圓梵行 如來座 即圓天行 如來衣 有二種 柔和 即圓嬰兒行 忍辱 即圓病行 此五種行 即一實相行.”
- 33 智顓,『妙法蓮華經玄義』(『大正藏』33, p.725下),“又一心五行 即是三諦三

味 聖行即真諦三昧 梵嬰病即俗諦三昧 天行即中道王三昧 又圓三三昧 圓破二十五有 即空故 破二十五惡業見思等 即假故 破二十五無知 即中故 破二十五無明 即一而三 即三而一 一空一切空 一假一切假 一中一切中 故名如來行。”

- 34 智顓,『妙法蓮華經玄義』(『大正藏』33, p.726上),“觀心圓五行者 上來圓行不可遠求 即心而是 一切諸法中 悉有安樂性 即觀心性 名爲上定 心性即空即假即中 五行三諦 一切佛法 即心而具。”
- 35 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.120上),“謂止行即行不行 觀行即非行非不行 慈悲行即不行行 合上衣座舍等 是爲約三法明行處。”
- 36 智顓,『妙法蓮華經文句』(『大正藏』34, p.120中),“分十種爲二邊 九是生死 一是涅槃 二俱遠離 即寂滅之異名耳。”
- 37 智顓,『妙法蓮華經玄義』(『大正藏』33, p.721中),“寂滅相 即是雙遮雙亡”;p.779下,“實相故 言常寂滅相 即大涅槃。”

Study on the Austerities [戒行] as the Comfort Pleasure Practice [安樂行] in the *Lotus Sutra* [法華經] .

Lee, Seungnam (Gwangdo)

Professor at the Department of Buddhism
in Geumgang University

The comfort pleasure practice [安樂行] can be divided by the three parts of comfort [安], pleasure [樂] and practice [行]. The comfort belongs to wearing buddha's garment [著如來衣], the pleasure to entering buddha's room [入如來室], the practice to taking buddha's seat [坐如來座]. And also the comfort is related to the conduct of the samatha [止行], the pleasure to the conduct of the mercy [慈悲行], practice to the conduct of the vipasyana [觀行]. Through these three conducts, the three virtues [三德] of the eternal body [法身], the freedom from all bonds [解脫] and the wisdom of knowing all things in their reality [般若] can be achieved. Viewing the chapter 14 of The Comfort Pleasure Practice [第14安樂行品] in the *Lotus Sutra* [法華經], it's written in the order of the samatha, the mercy and the vipasyana. Researching the contents of this chapter focusing on the samatha, endurance [忍辱] and keeping away from faults [離過] are especially emphasized. These kinds of the samatha means by the austerities [戒行]. The comfort pleasure practice is preached to a beginner as bodhisattva [淺行菩薩] who is shallow in ability. The beginner as bodhisattva is apt to be stained with turbid things and has little merit to do the all-embracing conduct [圓行]. For this kind of bodhisattva the Buddha preached the comfort pleasure practice. In this reason the austerities are emphasized. Among the three conducts of the comfort pleasure practice, the samatha belonging to

wearing buddha's garment brings to fruition of the eternal body. The mercy related to entering buddha's room results in the freedom from all bonds. And the vipasyana connected to taking buddha's seat produces the wisdom of knowing all things in their reality. The comfort pleasure practice is a kind of the all-embracing conduct [圓行] . Although the three conducts are separately said, they commonly belong to the all-embracing conduct. Namely a conduct is the same as three conducts and three conducts are the same as a conduct. In this sense the conduct of the samatha is the same as the three conducts of the samatha, the mercy and the vipasyana. So, with the austerities as the samatha the three virtues can be achieved. Consequently, the comfort pleasure practice consists of the three conducts of the samatha, the mercy, the vipasyana and among them the conduct of the samatha related to the austerities, which are absolutely necessary for the beginner as bodhisattva, can produce the three virtues.

Keywords : *Lotus Sutra*, comfort pleasure practice [安樂行] , samatha, mercy, vipasyana, three virtues [三德] , austerities [戒行]

李承南氏の発表論文に対するコメント

菅野 博史*

今回の学術大会の総合テーマは、「東アジアにおける生活規範—戒律、大乘戒、清規、非僧非俗」であり、イ・スンナム氏の論文は、『法華経』安楽行品に説かれる四安楽行を戒行と関連づけて考察したものである。内容から見ると、「『法華文句』における安楽行の解釈—戒行を中心として—」という題の方が適当であると考え。評者は、『法華文句』の訳注研究を刊行したことがあり¹、また慧思『法華経安楽行義』についても研究を発表したことがある²。四安楽行は、釈尊滅後の悪世における『法華経』を弘通するための注意事項として説かれたものである。以下、イ・スンナム氏の論文の概要を簡潔に整理したうえで、意見と質問を述べる。

第一章の「止行の戒行」においては、「四安楽行は止行・慈悲行・観行の三行を用いて身業・口業・意業の三業と誓願を導き、断徳・恩徳・智徳即ち法身・解脱・般若の三徳を成ずるものである」（385頁）、「四安楽行の止行は忍辱と離過について説いており、それは戒行を意味する」（387頁）と述べ、止行＝戒行の視点から安楽行を解釈することの妥当性を提示している。

第二章の「戒行の重視」においては、『法華経』法師品に説かれる法師行が入如来室・著如来衣・坐如来座であり、『法華文句』の解釈する安楽行が著如来衣・入如来室・坐如来座であることを指摘し、その順序が相違することと安楽行においては著如来衣＝止行＝戒行が重視されていることを指摘している。その理由として、「法師行は弘経益他により慈悲心が

*創価大学文学部教授。

優先となるが、安樂行は悪世弘経により忍辱と離過が優先となるのである」(389頁)と述べている。

第三章の「戒行の因果」においては、「安樂行の三行は、一行が即ち三行であり三行が即ち一行である。止行が即ち止行・慈悲行・観行の三行である。つまり止行の戒行により三徳の大涅槃を成就することができる」(393頁)と述べている。

本論は、『法華文句』の安樂行に対する解釈を丁寧に解説したものである。具体的には、因行としての戒行とは何か、戒行を強調する理由とは何か、戒行によって成就される果徳とは何か、という問題に取り組んだものである。この点、私たちの安樂行に対する理解を大きく助けてくれるものである。ただし、全体的な感想として、先行研究、参考文献が一つも記されていないことは、論文として残念であり、今後、より広い視野の研究を期待したい。

以下、具体的な質問を箇条書きにする。

1. 『法華経』は円教を説いているため、この経を保持し知らせる法師は円教菩薩である²⁾(383頁)とあるが、注2を見ると、「円教菩薩」という概念は出ていないが、注としては不適當ではないか。
2. 『法華経』安樂行品の所説と『法華文句』の解釈を区別する意識が希薄である。たとえば、「安樂行は法身・解脱・般若の三徳を成就するものである。これらの三徳を成就するためには、止行・慈悲行・観行の三行を行わねばならない。したがって安樂行は、これらの三行からなると言える」(384頁)とあり、また「第十四安樂行品において安樂行は著如来衣・入如来室・坐如来座であると説いている」(387頁)とあるが、『法華経』の安樂行品が上記のように説いているわけではなく、『法華文句』がそのように解釈しているだけである。経典とその注釈書を区別する意識が重要であると考えられる。
3. 勸持品は深行菩薩のためであり、安樂行品は浅行菩薩のためであると

解釈することは、『法華文句』に限らず、中国の法華經疏の伝統的な解釈について良いと思う³が、インドにおける『法華經』の歴史的成立を視野に入れると、次のような解釈にも配慮する必要があるのではないであろうか⁴。

勸持品と安樂行品との間に、高位と低位の菩薩に対する異なった教えを見るのではなく、むしろ連続性を見ようとするものである。勸持品の記述をよく見ると、決して攻撃的な布教を勧めているわけではなく、『法華經』の一乗思想もたらす必然的な運命としての迫害を指摘し、それに対する忍耐を説いていると見られる。この迫害は『法華經』の思想の運命である以上、避けることができないものではあるけれども、できるだけ周囲との不必要な軋轢を避けるために、慎重に社会や既成の仏教教団と関わっていくことが重要視される。そのための方法を説くのが安樂行品であると解釈される。

4. 391頁の表のなかの「著忍辱衣」は、「著如来衣」の誤りではないか。

以上、若干の質問をさせていただいた。ご回答のほど、よろしく願い申しあげる。

【注】

- 1 『法華文句』(I)～(IV)(第三文明社、2007～2011年)
- 2 Daniel B. Stevenson and Hiroshi Kanno, *The Meaning of the Lotus Sūtra's Course of Ease and Bliss: An Annotated Translation and Study of Nanyue Huisi's (515-577) Fahua jing anlexing yi*, 2006, Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica, vol. IX, The International Research Institute for Advanced Buddhology. 日本語の論文については、『南北朝・隋代の中国仏教思想研究』(大蔵出版、2012年、107-163頁)を参照。
- 3 吉蔵『法華義疏』巻第十、「持品末云、悪世弘經、被毀辱誹謗、受諸苦惱。小行之流多生退没、不能弘經。是故今明安住四行、雖居惡世、常受快樂。今欲示末世弘經模軌、故說此品」(大正三四、五九四上一一～一四)を参照。

- 4 拙稿「『法華経』における地涌菩薩について—現実世界への関与」（『東洋学術研究』49-1, 2010.5, pp.151-170）を参照。

（上記の菅野博史氏のコメントに対して、李承南氏からの回答は提出されなかった。）